

月寒九条の会

会報

2014年6月 No.5

月寒九条の会は5月10日、第5回の例会として、「かしこくたくましく心豊かな子どもたちのために」と題した教育シンポジウムを、豊平・清田教職員九条の会との共催で開催しました。シンポジウムでは、始めに3名の方から報告をいただき、その後参加者をまじえ意見交換を行いました。

管理職と共同してがんばれる 学校を作ることが困難に

再任用で現在も小学校で教えている吉岡さんは、小学校の現状について以下のように報告しました。

荒れる学校に一定のパターンがあるわけではなく、どんな学校でも荒れる可能性がある。また、一度荒れた学校でも進学や卒業を機に立ち直る。しかし学級運営がうまくできず、休職せざるを得ない先生も出ている。

子どもも教師も休める暇がない。子どもたちは登校するとすぐ自主学習、学校が終われば塾と遊ぶ暇もない。

学力、体力とも全国平均を上回るようにとの道教委の指示のもと、各学校はプランを作って実施を迫られている。これらへの対応や各種の報告

書作りなど、教師の仕事は膨大になっている。

全教の調査では、過労死ラインとされる月80時間以上の残業をおこなっている教師が全体の64%にも達している。

この間、管理教育の強化が進められ、教員の評価制度が導入されるとともに、職員会議が形骸化し、教育の本質論が全く論議されない状況になっている。こうした中で、10年ほど前までは、校長も含め良い学校づくりのための話し合いができたが、今では、管理職と共同して子どもたちのためにがんばれる学校を作ることが困難になってきている。

連絡先：野口 (852-9360)
加藤 (852-2346)
e-mail:tsukisamu9@yahoo.co.jp
http://www.geocities.jp/tsukisamu9/



子どもたちが生き生きと 過ごせる場は地域の財産

3月まで、学童保育所「翼クラブ」で指導員をしていた小林さんは、以下のよう

に報告しました。

学童保育所とは、放課後、毎日、子どもたちが「ただいま」といって帰ってくる所。仲間がいて、楽しい遊びがあり、声をかけ、見守ってくれる指導員がいる。異年齢の仲間の中で、塾や習い事ではできない体験を子どもたちはしていく。子どもたちのトラブルもあるが、何度もやり合ったり、話し合ったりする中で折り合いを付け、子どもたちでルールを作っていく。

翼クラブでは、人とのふれあいの遊び、自然の中の遊びがあります。畑で野菜を育

てたり、餅つき、野外昼食など、働くこと、食べることもありと、多彩な活動をしています。地域の方々にも暖かく見守られ、地域の夏祭では大きな役割を果たしています。子どもたち自身で作りに上げる行事もあり、今年の6年生は自分たちで会議を重ね、石巻の被災地に卒所旅行に行きました。

今は、1年生でも5時間授業となつて、子どもたちがおもいっきり遊べる時間がありません。地域の中に、放課後を見守られながら、子どもたちが生き生きと過ごせる場所があることは、地域の財産ではないでしょうか。

<月寒九条の会 講演と 総会のお知らせ>

日時：6月29日(日)
14時から16時30分
場所：東月寒地区センター ホール
(月寒東3条18丁目)

記念講演：**戦争する国づくりは許さない ー安倍首相の「集団的自衛権」の危険なねらいー**

講師：高崎裕子 弁護士
広い会場です。会員でない方もお誘い合わせの上、お越してください。

記念講演終了後、16時より総会を開催いたします。

なお、講演の前に、うたう会「木いちご」のコーラスがあります。

資料代：300円(中・高生無料)

子ども時代を安心して穏やかに 過ごせるようにすることは大人の責任

北海道自由が丘学園の大塚さんは、東区における児童デイサービスにおける経験も含め、以下のように報告しました。

今の学校は統制され、普通の子（出す、遅れず、騒がず）でいることが求められると共に、学力競争からくる学習の押し付けで窮屈な状態になっている。孤独を感じる子どもの割合はOECD加盟国で日



本はずば抜けて多い。

子どもに必要な場は、居心地が良くて、ちよつとした困りごとを気軽に話せる場。必要なのは、みずからの悩みや葛藤を友人と共有し、打開の道を見ずから切り開く力になる学びであり、基本は人間同士のお付き合い。人と人との付き合いを体験できる集団の中で人は育つ。子ども時代の過ごし方は大切で、安心して穏やかに過ごせることがなければ、民主主義や平和を信じられなくなる。その点で大人の責任は大きい。

自由が丘学園では、内容がわかることを大切に、教科書や学年にとらわれず、子どものペースに合わせて学習を進めている。また、子ども一人の個性を自由に表現する取り組み、生徒自身が企画する様々な行事、みずからが体験する取り組みも行っており、自身がやったことが残るようにしている。子どもと大人が自由な雰囲気であれあい、交流できる場としている。

大切な人とのつながり

参加者を交えた討論では、

学級崩壊とか児童の「切れる」と言われる行動など問題が多い中、翼クラブでは自然にふれる活動や、食育など大変良くやっておられる。反社会的行動に対しては、人間力をはぐくむことや食育も必要でないか。

吉岡先生の現職時代のことをもう少し聞きたいという声に、吉岡先生は、「朝は5時から8時半までの間に授業の準備をすませ、日中は子ども達とおしゃべり。毎日学級通信を出し、必ず誰かをほめた。しかし、今の先生方にはこうしたことはできないでしょう」と答えました。

「うちの子どもはおとなしい子で、グループにも仲間入りできなかったが、翼クラブに入っていたら変わっていたかも。今の子どもは異年齢で遊ぶこともないが、翼クラブは誰でも入れるのか」との質問に、小林さんは、「夏・冬休み期間だけの入所というものもあり、春休みには『お試し入所』も行っている」と回答。

さらに、小林さんは、学童保育所での経験として、「暴れる児童を外へ連れ出した事があつたが、暴れるにはそれなりの理由があるはずと、まずは謝って理由を聞いてみると、夫婦げんかを何度も見て嫌だったなどと、いろいろ話してくれた。学童に怒って帰ってくる子どもに『どうしたの』と声をかけ聞いてやると、『俺は悪くない』と先生の悪口が出てくる。『そうかい、それは嫌だったねー』とまずは話を聞くことで、子どもは落ち着くと語りました。

この点については、教育評論家の尾木ママも言っているように「どうしたの」からまず行く。大人がそういうことを意識できるかどうかが大切とされました。

締めくくりとして、座長の吉野さん（自由が丘教育と協同の研究所、代表）は、「親の願いは、できる限りすばらしい教育環境を作ってやり、子どもはどんな場合でも力強く育って欲しいということですが、そのためには人間力、総合力が必要です。これは自分の子どもだけと単独でできるものではなく、地域ともつながって達成できるものです」と、人とのつながりを強調してシンポジウムを終わりました。

<参加者の感想>

- 1) 3人のパネリスト、それぞれの分野から、子どもたち、親たちの実際が伝わってきて、子育ての大変さをつくづく感じました。学童の先生のお話から、こんな中でも輝いている子どもたちの姿、苦しんでいる子どもたちを受け止めている指導員の方に改めて心打たれました。
- 2) 興味深いテーマでした。吉岡さんの学校の話、もっと時間をとって話をうかがいたかったと思います。
- 3) 学校現場、このままで良いのでしょうか。子どもは国の宝、子どもの教育に力を入れるべきです。
- 4) 教育を取り巻く危機的状況があることを保護者の方々はあまり意識されていないように感じます。このような催しで知らせていただくと良いと思います。